

第四十二回 顎関節症と血流障害(2)

例えば右手で杖を持って歩いている人は右側の歯の咬み合わせの高さが反対側よりも低いことです。

地球は太陽の周りを左回転する為に運動場を走るときは左回り、(海の回遊魚も左回り)その為にきき手は右ききになりやすいものです。左手で杖を持っている人または左足短足の人は普通ではなく、何かがあるといわれています。

顎関節症も右側におこりやすいといわれています。

咬み合わせの低い側の脳に虚血現象、反対側の高い側は出血現象をおこす原因の1つとなり、何年先かわからないが血管壁の悪条件が重なった時に脳の病気が発生することになります。

脳内出血をおこしたというならば出血をおこした反対側のどれかの歯が低いことです。

脳梗塞というならばその側のどれかの歯が低いことになります。

低い歯を高くすれば半身マヒが瞬時に取れるものですが血栓が出来ている為にやっちはいけないものです。(脳、肺等に…)

症状が落ちついてからやるべきです。

このように右手で杖を持って歩いている人は頭蓋骨の蝶形骨(左右一対の骨)の翼状突起は左右別々に下向きに伸びています。(牛の角は上向き、人間の角は下向きです)が右の方が歯が低いものですから右側の翼状突起は後にさがっています、反対側は逆に前に出てきます。

(電磁波などの影響でも右側は後へ、薬等の場合は左側が後へさがります)このように左右の翼状突起が互いに逆方向に捻れますと体全体の血流障害をおこし(特に薬の血流障害は強い)自然治癒力の低下をおこし、体温の低下もおこし色々…。

(但し急性症状、例外もある。この場合は除く)

女性の不妊の人はおでこの印堂(チャクラの)に必ず異常反応をおこしています。このような人は左右の翼状突起を左右均等の位置に合わせなければなりません。そして顎関節症の自覚症状が消えても印堂の異常反応は消えません。顎関節症の関節円板を左右均等に持ってきてから、大脳の異常反応、足の異常反応を読み取りながら歯の噛み合わせの調節をすることにより異常反応が消えて体全体の血流がよくなり内臓始め筋肉痛・関節痛の症状も軽くなるものです。

翼状突起を触診する場合は左右の親指を上顎の左右の奥歯の咬合面を越えてさらに奥の歯肉のドテを越えてさらに指を奥へ伸ばすと突起の先端部分にあたる。

関節円板が異常をおこしているか見分ける方法として左右の上の歯の歯肉の外側のドテに沿ってゆっくりと奥へ指を入れてゆきますと下顎の骨との間の隙間が左右にしているならば正常だと思われれます。

テストとして下顎を少し右へずらしてみますと左側の隙間が狭くなり、右側の隙間が大きくなります。つまり左側の下顎と共に歯が前へ出るものですから、上下の歯の咬み合わせが高くなり、右側の下顎との奥歯の歯が奥へ入り込む為に歯の咬み合わせが低くなります。そこで左右の歯の咬み合わせの高さが違う為に首の骨が後へ逆カーブ(正常は前湾曲)になり不定愁訴がおこり、さらに左右の歯の咬み合わせの高さの違いにより、さらに首の骨が捻れ頸椎ヘルニアへと進むことになります。

又、このように関節円板が異常をおこしている側に耳鳴、耳詰まり、難聴、その側の頭の後から首、肩にかけて異常を訴えるだけでなく反対側の、腰から足先迄血流が悪くなるものです。

下顎がズれることにより、首の骨、頭骸骨全体がズれることにより脳幹という生命中枢迄狂わせてしまうものです。

体のどこかが悪いというならば必ず顎関節症を起こしているものです。